

永平広録について

酒井得元

一

『永平広録』についてお話をいたします。

道元禅師の著書というものを、大別しますと、『正法眼蔵』と『永平広録』ということになります。前者の方は世間に知られていまして、皆さんも読まれ、研究者も出ております。ところが後者の方は、宗門におきましてもあまり読まれておりません。また『永平広録』の伝承も一種類しかございません。それは円山の『流布本』というものと、『門鶴本』というものとであります。それでこの二つを対照いたしましてなんだかんだといわれております。この『永平広録』は何故読まないかと申しますと、それは恐らく漢文で書かれたものであるからかと思ひます。大体が漢

文というものは、日本人にはあまり親しまれておりません。それでこの『広録』を私は、何とかして読みたいと思つております。その前に圓山さんに『永平家訓』というものがあります。この『永平家訓』に冠注傍訓の本がありましたが、それを手がかりにして一生懸命勉強し、それから、『広録』にとりついていったものであります。そのようなわけで、『広録』というものは、安直には一寸入りにくいものです。これが一般に親まれていない理由の一つではないでしょうか、それからもう一つは、この『広録』というものは、禅師が中国に行かれまして中国の禅者と親しまれたものですから、その全てが当時の中国禅者達の用語法で書かれていたので、日本人にはどうも親しみ難いということです。そ

永平広録について（酒井）

れだからといふので私達永平門下のものは『広録』をそのままに出来ませんので、兎に角、あらゆる手段をつくして親しむ努力をしなければなりません。私は『広録』をずっと親しく見ておりまして感じたことは、あの時代の道元禅師が一番尊敬されたのは如淨禅師もさることながら宏智禅師であります。そして禅師はすつと『宏智広録』に親しんでおられたようでした。ですから『宏智広録』から『永平広録』を見ますといふと、やつぱり『永平広録』は『宏智広録』が原点であつたんだなと思うところがよくあります。

それから更に『宏智広録』を苦しんで読んでから『永平広録』を見ますといふと、ホツとした気易さを感じます。

『永平広録』には昔からこれといった注解書もあまりありません。注解書と言えば、面山さんの『事考』というのがある。それから本光さんの『點茶湯』といふのがあります。けれどもこれらのものは、余り私達には助けにはなりません。私はずっと昔から、東京の入谷のお寺の参禅会で『永平広録』を講義しております。その頃に、丁度伊藤俊光さんが広録の注解全書を出しました。その時に初めて『点茶湯』がその註解全書の中に入つて、親しく見ることが出来ました。この『点茶湯』はそれまでは珍らし

い本として写本で伝えられておりましたが、今度始めて印刷されたといふので私は非常に喜んだものです。私はその前から、その時代にはまだコピーがございませんものですから『永平広録』を学校から借り出してまいりまして、その中の書き入れを、全部書き写したものであります。今でもその本は持つております。なにせ昔の話ですけれどね。そんなことは持つております。をやらなければ『永平広録』は勉強できなかつたのです。それに『点茶湯』の方もかねてから写本しようと思つていましたがその時に出ましたからやめました。さて待望の『点茶湯』を読んでみましたらさうぱり何が書いてあるやらわからない。しかもあの言葉が埼玉あたりの田舎の方言ですから、ますますわからぬ。私がその頃毎月参禅会に行つていました入谷の寺のご住職の奈良有道さんという方は、非常な勉強家で、最近出た永平広録註解全書の中のこの『点茶湯』を一生懸命に苦労して読んでおられましたが、何が書いてあるのかさうぱりわかりませんので、遂に手を上げてしましましたと言われた、あの時の顔を憶えています。手を上げたのはあの人ばかりではない、こちらも手を上げました。それというのは、人々書いた人自身にも意味が通じていなかつたのでしょうか。またおそらくそれは提唱した

人自身もわかつていなかつたのではないかと思われるところが非常に多くありました。したがつて私は特に、『永平

広録』というものを読む時には、特別のまなこでもつて見

なくてはならないと思いました。漢文の先生が語録と読むと漢文式に読んでいるので、真意は通じていません。語録はやっぱり語録として読んでもらわなくてはいけないと思いました。ある漢文の先生が『禪の句集』というものを出していましたがその解説をみたら、あの解説ならば書かない方がいいと思いました。それらは全く禅語の意味に通じていないので。これは困つたものだと思いました。それは禅の世界と普通の漢文の世界とは全く違うからです。また表現が違います。私は日本人ですから日本語は知っていますよ。知つていますけれども、日本人の法律家に日本語で書いた彼の論文を見せられたとします。大体において読みます。然しその論文の意味がよくわかりません。書いてある字は知つても、それを書いた人と生活が違つたりしますと、通じないのはあたりまえのことです。したがつて漢文さえできれば、禅の語録というものが読めると思つたら大間違い、したがつてどこまでも語録は語録として読んで、語録に通じておいて頂かなければなりません。これ

は語録だけのことではないでしょう。

二

私が『永平広録』というものに魅力を感じたのは、実は最初の『永平広録』の文章です。これは『門鶴本』と『流布本』とでは順序が違いますけれども、円山の『流布本』では一番最初のところにある上堂です。

上堂、山僧、叢林を歴ること多からず。ただ是れ等閑に、天童先師に見えて、当下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず。乃ち空手にして郷に還る。

所以に一毫も仏法無し。任運に且く、時を延ぶ。朝朝、日は東より出でて、夜夜、月は西に沈む。雲収つて山骨露われ、雨過ぎて四山低る。畢竟如何ん。

良久して曰く。三年、一閏に逢う。鶏は五更に向つて啼く。久立下座。

私はこれは一番典型的な上堂だと思うのです。何故かと申しますと。これには色々な説もありますが、兎にも角にも道元禅師の仏法をこれほどまでに、明確に大胆に表現されたお言葉はないからです。またこんな大胆に明確に表現されたものは、他には一寸見当りません。語録にはその人の

個性がよく出でているので、それぞれ独特な用語があります。道元禅師の語録にも他の語録とは異った独特的表現が非常に多いのは当然のことでしょう。それを我々は初中終聞いておりまして、耳に胼胝が出来ておりますから何とも思つていません。例えて言いますと、単伝という言葉がそうです。あの単伝という言葉は、道元禅師独特の言葉と思想つて差し支えない。他の人のところでは使われていません。『如淨語録』や『宏智広録』でも見たことがあります。そして道元禅師で、一番気付かれるることは、その表現が非常に自然的なものが多いということでしょう。山水経などはその代表的なものです。あの表現の仕方のもとは、この最初の上堂のここのあるあたりから来でいるのでしょうか。先ず、道元禅師が如淨禅師に御目にかかるれたということは、全く最初から予期されていたことではなく偶然だったのです。うつかり御目にかかるれたというのが本当のことでした。」「等閑に、天童先師に見えて」道元禅師と如淨禅師との出会いはこの一語につきと言つてよいでしょう。この辺のことは『建撕記』なんかでよく御存知のことと思います。大体如淨禅師という方はそれほど有名ではありませんので、道元禅師もお会いになられるまで全くご存じ

なかつたのでしょうか。如淨禅師の語録は出ておりますけれども、他にまとまつた伝記などというものもありありません。道元禅師が出られなかつたら、如淨禅師という方は一向に映えなかつたのではないでしょうか。映えない筈ですよ、如淨禅師の仏法はあるの当时一世を風靡していた臨済宗の人たちのとは全く、次元が違つていていたのですから。私もこのところ二、三年、学校で『如淨語録』を読んでおりますが、『如淨語録』は読むのに非常に骨が折れます。実は、本音を吐きますと、『永平広録』よりはずつと骨が折れる。むしろ『宏智広録』よりも手強いところがありますが、『如淨語録』は読むのに非常に骨が折れます。実に、本音を吐きますと、『永平広録』よりはずつと骨が折れる。むしろ『宏智広録』よりも手強いところがありますが、荒っぽいとか、粗野といいますか、寧ろ『如淨語録』というものは、他の同時代の人の語録とは全く異次元にあって、従来の用語にどらわれないで、生の感覚をそのまま表現されたもののように思われます。またその辺に非常に文学的なところがあります。

よく『如淨語録』を学者が批評しています。「あれは道元と違うとか、或いは、臨済的なところがあるとか。」私はよくあんなことを、学者が何にも知りもしないで、批評するもんだと思います。恐らく彼らは果して如淨禅師の語

録が理解出来ていたであろうか、どうか甚だ怪しいと思

う。如淨禪師の仏法の絶対性は、彼等の思考とは全く次元が異っているので、分つてはいのではなかろうかと思う。あの評論家という者は、自分達の思考でもつて判断しているから、次元の異なるものには、それへの本当の評価は出来ない筈です。今日ここで、特に申し上げておきたいと申しますと、我々の禅といふものは、どういうことがと申しますと、我々の禅といふものの真実が、一般に考えられているものとは、次元が異つてゐるということです。つまり禅の真実の建前が、一般とは違うということです。何故かと言えば禅の真実といふものは、一言にして言えば人間の考えるところではないということです。即ち禅の真実は思想ではないということです。昔、私が沢木興道老師に会った、その時、老師から再三再四、思想じゃない、思想じゃないと言われた時、若い私は抵抗を感じたものです。道元禪師が思想家じゃないといわれるが、何故に思想家でないのかと抵抗を感じたものです。ある時、ある所へ行つて老師がその話をしました、時に、丁度そこに朝日新聞の記者だという人が来ておりまして、彼が思想でなくて何んですかと捩じ込んだことがありました。ついに彼にはこのことは分からなかつたようであ

した。

といいますのは、思想といいますと、これは、自分が考
えて、これはこういうことであると、一つの断定を作つてしまい、それによつて、それから色々なものを分別判断するものです。このようにして自分のものを持つ、この自分のものが思想というもののです。つまり思想は自分で色々思索し判断し、自分で納得がいったことなのです。つまり、我々はある一つの事に当面すると、それについて色々考え方をして、分別判断して納得するものです。私もその方面のことを一生懸命やつたことがあって前科者ですから言えることですけれど、色々考えるということは、結局どうしても自分勝手に考えることになるものです。それが自由思索、自主思考と言うことです。けれどもそれは妄想しているということには変りはありません。したがつて思想でも想し妄想した結果であったのであります。そして今まで懸命にやつっていたことが妄想であり、その妄想の成果を眞実であると、人間は一途に信じてしまうものであることがわかつた。

我々は考える葦といいますけれど、それは生理現象、生

命活動でやつてゐるのですが、その人間はものを考へると
いふことを本来、自主的と思つています。その自主的とい
うのは、人間の身体の生理活動の一つの表情であつたので
あります。そして我々はその生命活動の生理現象として、
自分のものにしたいとか、自分のところへ取り入れたいと
いうことをやつてゐるのであって、本来、自主的でもなん
でもなかつたのです。ただ生理的に、必然的に、あらゆる
ものを自分のものにしなければ承知が出来ないでいるもの
であります。これが人間の宿命といふものであります。
人間は思想の生活をするのであります。

まいつのまにか人間には、それぞれの性格なり癖なりが出来上つていて、それによつて色々な得手勝手な要求を作つ
ております。そして終には、その要求に適うようなものを
作り出してじまう。これらは他の動物にはないことです。
動物にはこうしたい、ああいうようになりたいという、未
来を考えるとか、思想するとかということはないでしょ
う。人間だけがこうありたい、ああありたいと思い、そ
してかく意欲的に行動しようとするところに、人間生活が
始まるのである。人間生活は必ず未来を持つことであり、
未来を期待するところから、結果の将来を待つてゐる。そ

こでどのくらい待つたらというところから時間を考へるよ
うになつて、人間だけが、時計を持つようになつてゐるの
であります。

このようにしたい、あのようしたいと思うところから
時計を持つようになり、やがて人間には人生というものが
開けてくるのである。かくて人生は開けて来るのですが、
その根本契機は意志意欲で、それが終始一貫して何んでも
自分のものにしたいという、行動になつてゐるのです。か
くて人間は生きてゆくのです。したがつて人生は自分の家
庭を作りたい、自分の財産を作りたい自分の國を作りたい
というようにして展開してゐるものであります。

三

言うならば人生といふものは元來我儘なものであります。つま
り人間の行動の全ては利己主義的なものです。人間はそれ
ぞれ自分の理想を持っていますが、その理想の正体も結局
のところ自己満足の追求であるし、自分の意志意欲の線に
適う時に、人間は納得がいくというものです。人間は自分
の意向にかなつたもの、自分の好きなものは、非常に大切
にし、或いは共鳴したりする。ところが自分の意向にかな

わないので対しては敵意を持つたり、または排斥したりする。そればかりでは收まらないで、利害関係が反したりしていると、その果ては殺意までおこすようになるのが人間なのです。このもとはというと、意志意欲というものが、人間生活をさせているからです。

ですから人間の思想などというのは、それぞれの本人は無意識であっても、各自の根底に持つてある意志意欲の利己主義・個人主義が、いつも契機となつていて、それによつて人間生活が営まれていてあります。

ですからその思想がどんなものであっても、必ず利己主義、個人主義がその根底にあつて動いている。つまり利己的個人主義的に成立した生活体験が、その人の思想を創り出しています。人間の欲望というものは利己的個人主義的に凄まじいもので、この人間の欲望というものが生活体験を作り、そしてそれが更に理想を創っています。したがつて生活体験が違う人同士は、思想が相反するのは当たり前のことです。したがつて乞食の生活をしている者と、金持ちの生活をしているものとでは、自然に思想も違うし主義も違つてくるのは当たり前です。

意欲を発端として思考を始め、それから理想が生じて人

間的生活努力が始まり、かくて人間は思想を持つようになつたのである。この思想を持つてあることが、人間の人格の根幹であったのです。かくて思想というもののを深く反省してみると、思想の次元に止まつていては、真実はあり得ないということが明確になる筈である。何故ならば、思想にはその本来の発生の経路からしても、必ず偏りがあるのであるのは当然である。故にこれを越えなければ真実への道は開けない。そしてそこに出家道として仏道が展開するのである。然し思想の次元に止まつてしまつている宗教もあるわけです。殆んどのものがそうであると言える。

私は若い時に徹底的に坐禅修行しようと思つていきましたので、臨濟の道場へ行つておりました。あそこで全員が、なんとかして見性しようという一つの雰囲気に、ひとりこんでしまつていました。そして見性するためには、自分の身体なんかはどうなつてもいいというような熱氣に燃えていました。つまり見性のためには手段を選ばぬといった調子でした。後から考えてみますと、これは別に考えなくとも分かるのですが、本人は真剣な求道人としてどうしても自分は悟りたい、そのためには自分はどうなつてもよいと、本当にそのように思つてしまふのです。然し、結局

永平広録について（酒井）

は、それはたゞ自分のものが欲しいということだったのです。つまり満足感の追求ということだったのです。それでどうしても安心決定がしたいということでした。安心決定が欲しいというのは、実は自己満足の追求に外なりません。そしてその果ては自己陶酔してしまうものです。これでは無量無辺の仏法の真実の中で、自分という小さな家を作つて立籠るだけで、真実を永遠に見失つてしまふもので、これは出家の仏法ではなくて、在家業であります。道元禅師は仏法はどこまでも出家でなければいけないということを言つておられることを、ここでもう一度改めて考え方直して頂きたいのです。道元禅師が徹底的な出家主義を貫通されつておられたことは、真実というものは、個人の家に取り込むことではない、即ち出家でなければならなかつたのです。したがつて出家は生活様式のみをいうではありません。真実というものは出家であったのです。自分のものにして取り込んでしまいたいというようなものは、仏道修行ではながつたのです。無所得無所悟の修行によつてのみ仏道修行は現成するものです。いつも人間は何でも自分のものにじようとしている、そして、自分のものにしないと満足出来ないということをよく反省してみると、本当のところ、彼

等が考へてゐるやうには、何も自分のものになつておません。それは一種の陶酔でしかなかつたのです。俺は救われてゐるとか、見性したとかいうのはまぎれもない陶酔です。大抵の宗教には殆んど陶酔があります。ですから、彼等の宗教修行は、いつでもそれを無我夢中に追求して、これを行つておられます。然しそのやうな修行は仏法ではありません。道元禅師は最初の上堂で「當下に眼横鼻直たることを認得して、人に瞞せられず、すなわち空手にして還る」と明確に示されている。渡宋されて修行されたが、それは、結局、自己自身を正確に認得することであつた。實にこの自分自分こそは仏法であつたのであつて、もう誰が何んと言おうと絶対に瞞されることはない。もうこれ以上は何の土産もいらないというので、堂々として自信を持つて空手で帰朝されたのです。したがつて、これこそ仏法なんていうものはないので「一毫の仏法もなし」と宣言されている。

私は『正法眼藏』を拝讀しておりまして、つくづく感ずることは、この中から尽十方世界という言葉を抜きにしたら正法眼藏はなりたなくなつてしまやしないかとさえ感じています。尽十方界の尽の字、これはまことに便利な字

でまことによく宇宙全体を残すところなく表現していま
す。この尽十方界が外ではない、我々が生きているとい
うこの事実が、尽十方界であったのです。よく世の中には、
自分は真理の探求をしているというものがあります。しか
し、真理真実というものは、探求して到達するものではあ
りません。もし探し得たものがあったとするならば、そ
れは探求者のかねてから目標にしていたものであつて、そ
れを今その時に自分のものにしたというに過ぎない。だか
らそれは真理でも何んでもありません。したがつて眞実の
修行者は、そのようなものをみんな捨ててしまわなければ
なりません。それが無所得無所悟することであり、それが
行であつたのです。

ところが人間というものは生理的習性で、いつでも、
「これだ」という自分のものを持ちたくてガツガツやつて
います。思想家とか哲学者とかいう人も例外ではありません。
そういう人達の所行を、私の知つてゐる評論家が
「思考の野獸、思索の野獸」と評しておつたことがあります。

私はこれは全くよく適中しているという感じを持つたも
のです。昔、私の若い時代、昭和十年頃に京都の哲学者で

西田幾太郎さんと田辺元さんという二人の師弟の間柄の人
がいました。ところがこの二人が真向から対立して、殊に
弟子の田辺さんが、猛烈にお師匠さんの西田さんを攻撃し
て言うのには「あなたは論理を知らない、哲学が分からな
い」と、目茶苦茶なことを言つていた。思考の野獸とはこの
ような田辺元さんに対する評論家が思わず吐き出した実感
です。

人間というものは、猛烈な欲求で、猛進すると、このよ
うに野獸となってしまい、反対するものに敵意を持つて噛
みつく、そこにあるものは眞実ではなく我利我利亡者の暴
靈のみがある。凡そ人間同士の論争の果ては、かく終末す
るものです。したがつてこのようなところに眞実はあり得
ない。また眞実は探求して得られるものではなかつたので
あります。眞実は求めるものでなく、修行することであつ
たのであります。凡そ思想というものはそのようなもの
で、どこまでも人間が勝手に考えたことです。したがつて
勝手が違えば、即ち思想が違えば争いになるのは当然で
す。これは師弟の間でも当然なことです。だからしてヘー
ゲルにしても、彼のそのままを受け継いだのは一人もいません。
全部が師匠に反対しています。思想というものは自

分が納得して、それに惚れこんで、ついにはそれに陶酔してしまった。それが思想というものです。人間には考える癖がある。しかし我々の禅では、修行の基本は莫妄想ということです。この莫妄想ということは、妄想を全てやめてしまえということではありません。それは考えるということを、考えていただきたい。考えるということが、我々の全てではないのです。我々の身体について中国の禅僧が尽十方界真実人体といつています、これは

は真実を最もよく表明しています。真実の実体は人体なんです。我々がこうして眼を開いて自然界を眺めておりますと、そこに見えるものは天文学者からすれば大きな宇宙ということになるでしょう。そしてあの星からあの星までが何億光年という計算をするでしょう。かようく計算するのは彼等が観測してやっていることです。即ち彼等は彼等の眼識の中での作業であったのです。

してみると、結局、彼らが言っている宇宙とは、どういうものかといいますと、人間の身体の生命活動の範囲内のことです。宇宙とは人体であるということになつて、尽十方界真実人体とはこの事実を端的に表明していると言える。したがつて人間の身体は宇宙とぶつ続きなんです、そして決して大自然に対して第三者として立つてゐるのではないのです。大自然と一体なのです。この事実が主客合一ということであったのです。

四

坐禅を説明するのに、よく主客合一という言葉を使つていますが、人間の身体の生命活動の事実が、本当の主客合一ということなのです。主客合一などと言いますと文字通りに言えば、主人公と相手の客とが一体ということです。そうすると、この一体ということを、ある坐禅をする人達は間違えて、例えば無字の公案なんかをもらうと、無と一体になることと思つて朝から晩まで四六時中、無になろうと思つて一生懸命に「無、無、……」と唸つています。そしてとうとう無になりましたなんていうけれども、一種の幻覚症状です。

あんなに四六時中、一生懸命に「無、無、……」とやつて、無にしても、それは身体の方の活動であったのである。故にこ

ひとり切らうとしているのですから、これに陶酔して幻覚症状になるのが当然でしょう。然しそれは無になり切つたというものではありませんし、主客合一ではありません。こんなことを主客合一、能所泯亡などと考えて、一生懸命努力するなど氣の毒というものです。実は我々が生きているという事実が主客合一であり能所泯亡であったのです。私達は身体だけで生きているのではないのです、身体だけが私達をささえているのではないのです。身体と外界とが一体で生きているのです。

そうしますと、目でものを見るということはどういうことかというと、確に見る目と、見られる物があつて、一方を主とすれば、一方は客です。かくて主と客とがあつて私達の日常生活が成立つている。この日常生活が私達の生命活動の全てではない、昼間の一つの存り方で、その全部ではない、つまり生命活動の中の一つの情景であつたまでのことであつたのです。したがつて生命活動は、私事ではなかったのです。私事は日常生活の次元においてのみあることであつて、生命活動は大自然の事実であり、尽十方界の事実であつたのです、したがつて本当の生命ということは、自分の生命というものでもなくて大自然であつたのです。

我々が考へている肉体としての身体というものは、生命の全てではなく、生命活動の一要素、即ち道元禪師流に言えば調度であつたわけです。生命活動は身体と外界とが一体のことであつたのです。この生命活動そのものの実体が、自然であり人体であつたのです。

私達が物を見るということは、如何にも個人のことのようではあつても、その見るということは一応は個人が物を見ることではあるが、実はそれは身体の一つの作用ではあっても、生命活動の一つの事象であつて、言うならばそれは宇宙の事実であつたのです。宇宙は全部が生命活動であつて、そしてその活動の形体が宇宙のあらゆる諸事象であつたのである。人間で考へると必ず主人があり客がある、それでなければ生活は成立ないのですが、然しその生活も実は外ではない生命活動の一様相であつたので、これは立派な宇宙の実態であったのです。それが生命活動であるからには、そこには主も客もない主客合一であつたのです。かくて人体が人体であるには、主客合一の宇宙の真実、つまり尽十方界真実人体の事実であつたのであります。したがつてどのようなことでも、これは人間の一つの体験などではありません。

禅は主客合一の宇宙の真実を実修し実証することであつて、特種な体験をすることではありません。人間というものは体験ということが、どんなことであるかよく知らないで、自分の感情感覺だけで、決めてしまって物を言うものです。眞実は決して個人に体験されるものではありません。禅を体験だなどというのは余りにも、軽率と言わなければならぬし、また禅を心得え違ひしていると言わなければなりません。よく臨済宗の人達は体験しましたと言いますが、臨済宗は同じようく禅宗と言われてはいますが、全く別の宗教です。これを同様に考えて、混同する人があります。余りにも自宗を知らないというものです。道元禅師には体験などという言葉はありません。大体、体験と言えば、例えは、何か彼がかねてから念願していた特別の異常な精神状態に、ようやくなることが出来たとすると、その時に彼は当然のことながら非常に感激して、彼にはそれを生涯忘れられない体験となる。またそれが忘れられないで、時々にその時のことと思い出して陶酔感に浸るものです。そして更にあのような体験は誰れも出来ないだろうと、自己の優越感に浸りこむのです。このような自己の誇に生き甲斐を感じることがあつても、それは陶酔ではあ

う。 つても、真実でないことは今更言うまでもないことでしょ
う。
六祖の『金剛解義』には「心有能所即非禪定能所不レ
生是名禪定ト。禪定即清淨心也。」とあります。したがつて
禪定ということは、精神統一でもなければ、何にも考えなくな
ることでもない、即ち一つの特別の精神状態ではなかつ
たのです。主客合一の宇宙の真実であつたのであります。
つまり尽十方界真実人体の真実が禪定であつたのです。故
に「禪定は即ち清淨心なり」と言われているのです。

道元禪師は普通の人間として宋土に渡られたと思いま
す。普通の人間というのは、皆な自分の理想というものを
持つていて、それを追求し続けているものです。これは人
間の生理的習性ですし、これがなかつたら人格喪失という
ものであります。これには特別の教育は必要ない。最も教育も、
いうならば理想を持たせるように指導していますが、人間
は生理的に意欲的生活をすることになつてゐる、そして意
欲的生活では、自分の欲しいものに向かつて暴走するもの
です。これが人間の在り方です。その暴走は個人の満足感
の追求に終始しているものです。

満足を感じてそれに陶酔することになる。即ち必ず結果的にはこのように、人間は陶酔するものです。陶酔するということは、麻薬患者となることでしょう。どうも人間は誰れでもが麻薬患者的な素質を持つているものです。だからいつも何かに陶酔したがっています。人間の世界には酒はつきものになっている。然し動物の中には酒を飲むものはいないでしょう。人間は酔っ払ってしまうことが出来た時に、救われたような感じに浸り込むものです。

恐らく道元禅師は渡宋に際しては、必ず何か一つのものを求めてゆかれたに相違ないと思う。ところが色々な問題にぶつかって、ついに求めるということが、また例え求められたとしても、それらはつまらないことであることが分られたのでしょう。そしてあの上堂が出来たと思う。天童山僧堂で、坐禅しておられる時に、師匠さんの如淨禅師が隣の席に坐っていた修行僧が居眠りをしておるのを見て、「寝ていてどうするか」と言って厳しく叱られて靴を脱いで殴られた。道元禅師、それを隣りで聞いておられて、それで初めて坐禅の真実が分かられたんです。つまり、居眠りしてはいけない、眼が覚めていなければいけないということがはっきりと分かられたのです。そしてその時に

身心脱落ということを、明確にすることが出来たのです。

それまでは恐らく道元禅師は、坐禅ということに対しても、それは何かを求めるものというような感じを持っておられたのではないかと思う。ところが我々が求めて理想としていたものを獲得するということは、身体の働きの中の人間的なもので、生きている身体の働きの中の全てではなく、その一部分でしかない。私はこの頃、人間の生命活動している身体そのものを、川の流れに例えてみると、理解やすいと思う。年がら年中、川の水は流れ続けていて、決して、絶対に逆流することなく下流に向かっています、これと生き続けている身体と同じです。身体は後退りなく生き続け新陳代謝をやっています。これは川の水の流れと同じです。川の水は下流にいつも流れ続けていますが、ただ流れているわけではありません。その時の状態によって水面にはいつも絶えず変化している模様を浮かべている。波紋が出来たり、渦巻が出来たり色々な表情が現われるものです。これと同様に、生命活動している身体にも色々な表情があるのです。つまりその表情というのが人間生活です。したがって我々はこの身体が生きている限り、毎日昼間のある時間は、必ず生活活動をしつづけなければなりません。だか

ら私達はそれでご飯を食べなきやならん、学校も行かなきやならん、月給ももらわなきやならん、話もせにやならんといったわけです。こういうようなことは、言うまでもなく生きているから、行なわれていることです。つまり言うならば、これらは水面の波紋のようなものだったのです。波紋は一時的なものです、したがつて波紋のために川の流れが変化し停滞するということはありません。どんなに波立ちがあろうと渦巻きがあろうと、川の流れは、そのようなものには一向にかかわらず流れ続けています。また、波紋の方も消えてしまつたらそれつきりあとには何も残しません。昨日の台風はどうなつたかと、太平洋に聞いたじです。皆こういうように流れています。つまり色々な波紋を浮かべ、渦巻きをし、いろいろな表情を水面に現わしていつも流れ続けている、これが我々の生き続いている身体というものです。この身体は大自然そのものです。この人生上の諸問題を超えた大自然の絶対的事実、これが脱落ということです。だから道元禅師は、身心は脱落なり、脱落は身心なりということを、この時に本当に悟られたのです。

道元禅師はそれまで、坐禅の中で、何か一つのものを求めて一生懸命やつておられたに相違ない。しかし、ここでもって坐禅は何かを追い求めることではなくて、つまり何かを求めるというような人生の波紋、渦巻などのあらゆる表情を、超越して生き続けている生命の大なるの真実を、そのまま実修し実証するものが、坐禅であつたことに氣付かれたのでした。居眠り坐禅では、それは睡眠であつて、真実を修行し実証し実践することにはならない。とにかく正氣で正身端坐する時に本当の自分、即ち大自然の真実が現成しているのです。その時の本人の感覚がどうのこうのという事ではありません。つまり身心の真実といふものは、無所得無所悟の正身端坐の只管坐禅をするということによつてのみ、修行され、実践されるのです。これは決してあることに陶酔するということであつてはなりません。これが眞実を実証することであったのです。かくて尽十方界の眞実を実証することができたのです。私達人間の日常は、波紋、渦巻きの人生問題の表情に終始して、それだけが全てであつて、本流である身体即ち身心を完全に見失つているのです。

五

道元禪師は身体の事実を身心不二不二身心と解釈されている。そこでこの心ということは、どうということを言つておられるかということを、次に述べてみたいと思います。これは心意識の心、つまり意識活動のことではないのです。人間というものは精神とか魂とかなんとかいうものが存在していると思つています。私共の学校でも建学の精神とか、何とかやかましく言つています。学校なんかで言つてゐます精神は、その学校を設立するようになつた理念を実践することであつて、それが教育の方針であつたのであります。即ちこれがその学校の建学の精神というものです。するとこの場合の精神とは、理念であり、意欲的な人間の生活努力を限定するものであると言える。つまりこの場合の精神とは、意欲的行動を規制するものではあるが、結局は意欲活動といつてよい。これを一般的には絶対的なもの、神聖なものとして「精神」と呼んでいるまでのことである。故にこのような精神をも越えたものが心であつたのであります。

身心脱落の身心はどういうことかと申しますと、先ず心

永平広録について（酒井）

ということから述べることにします。それには「一切法即一心、一心即一切法」という言葉がありますが、これが本当の心の意味です。この一心が仏法の基本なんです。この心というのは、伝心法要の黄檗の言葉を借りますと、「この心というものは、かつて生ぜず、かつて滅せず」「色にあらず、形にあらず、相にあらず。方にあらず。有にあらず、無にあらず。新旧にあらず。大にあらず、小にあらず」と、即ち、存在の問題、古いとか、新しいとかいう、時間の問題、それから長いとか短いとかいうこと、あるいは大きいか小さいとかいう比較の問題。これらはすべて人生上の問題です。即ちこれらは人間生活の調度といつたらいいでしよう。これらがないと、人間生活は成立しない。長いとか短かいとか、良いとか悪いとか、あるとかないとか、これらは人間が意欲生活する限り、なければならぬ問題で、これらがなければ人生問題はあり得ない。それは本来の心、即ち大自然の生命活動そのものではありません。

この心は、宇宙全体の生命のことです。生命とは一時も休むことなく生きつづけている事実です。この宇宙のあり

とあらゆるものは、生き続いている生命そのものの形体であつたのです。つまりどんなものでも、それはそれなりに生き続けています、そしてその生き続いているという姿が、それがコンクリートであつたり、材木であつたり、人間にであつたりしているんです。即ちこの生き続いている姿が身体であつたのです。

したがつて身体と心とは別ものではありません、不二です。この不二ということは、イコールということではなく、イコールということとは、全く別なことです。即ちイコールということは、色々なことが全て同じである、全く別のもの同士の関係であつて、全く不二ということとは別のことであつたのです。不二ということは、イコールのように別のことがあつて、その両者がイコールの関係にあるといふのは全く異つて、別のものではなく、両者ではない、一つのものであるということです。つまり一つの事実であるということです。身と心とは全く同じことだったのです。特に言うならば心が実体であり、身が心の事実の形体だと言える。つまりこの両者は一つの事実の表情と実体というものであつたのです。

つまり、身心とは一つの大自然の生命活動の事実であ

り、尽十方界の真実であつたので、尽十方界真実人体と言われているのです。つまり身心は大自然の絶対事実であつたのです。そして絶えず身心の様相として、人生上の諸問題はうごめいている。即ちそれは身心の生命活動の景色であり、様相であつて、この景色や様相の如何に拘らず身心の事実は、身心であつて絶対的な尽十方界真実人体であつたのです。この絶対の事が、脱落ということだつたのです。この脱落ということは、尽十方界真実人体の絶対のことであり、身心の事実のことであつて、人生上のことはなかつたのです。

世の中には身心が脱落すること以外に、真実はありません。だから身心脱落、脱落身心と、道元禅師は言われたのです。即ちこの身心脱落の真実は坐禅によつてのみ、完全に実修し、実証されているということに気付かれたのです。つまり道元禅師では、坐禅は身心脱落の真実の実修実証そのものであつたのです。したがつて坐禅は陶酔して自己を満足させるような、麻薬中毒的ものではなかつた。つまり坐禅は、尽十方界の真実を修行した尽十方界真実人体の実践であつたのです。

人間というものは、意欲のために奔走し欲望によつて行

動しています。したがって、何かやりたい、何かやりたいというのが、人間の正体というものです。その人間が坐禅すれば必ずただではおさまらないのです。即ち人間は坐禅しても、それで何かにならなければ承知が出来ません。

したがって、本当の坐禅がわからない人は、坐禅は瞑想だなどと本気で考えたりして、そして実際瞑想をやっているものもあります。だから世の中の学者という人の中には、自分勝手に「道元の瞑想」なんていっているものもいます。

まことに困ったものです。坐禅をするといって実際は坐禅をしないで瞑想して、自分がかねてから期待していた異常な状態に向かって努力して、遂に目的を達すると、これを神秘的体験という。その神秘的体験とは一体何でしようか。私も昔は神秘主義者で、何んとか体験をしようと、遮二無一にやつたものです。遮二無一に断食したり、不眠やつたり色々なことをやって、かねてから自分のあこがれ願つていた境地になり得たということは、それは決して絶対的な真実でもなんでもない、それは念の入った異常な救いがたい陶酔であつたまでのことであつたのです。そしてその心境は幻想であつて、本当の神秘ではない。本当の神秘というならば、平常心これでなければならない。何とも思

わず暮している、日常生活の事実が神秘そのものであり、真実であったのです。

坐禅はこのような神秘体験をしようとする瞑想ではありません。坐禅をしているときには、うつかりしていると、何かを考え、何かを追求しています。そしてある特種なこと追求するこれが瞑想です。それでは坐禅しているのではなく、それは静止の姿勢で仕事をしている人間であります。ただの静止の姿勢では、いつも生理的な動きに流れ、考へが浮かんではそれを追求する。そして何もしないと、手持無沙汰になる、これが人間というものです。そしていつも何かを人間は追っかけているものです、その時に人間なのです。したがって追求する目標を失つた人間は、失意の人間となつて、時には人間性喪失といふこともあります。この人間性に流されないで正身端坐をつとめるところに、尽十方界眞実人体を実修し、実証するのである。これが坐禅であつたのです。なにか目標があつてそれを追いかけるならば、前述の六祖の言葉に「心に能所あれば、即ち禪定に非ず」とあつたように、それは禪定ではない。したがって禪定は決して瞑想であつてはならないのです。

永平広録について（酒井）

人間の妄想というのは、自分のものを作りたいということでお終始している。結局、そうすることは、ただお目当てのものが、自分のものになつたように感して、満足をするだけのことだ。ただこうすることに夢中になるのが、欲望の追求の人間の行為の実態です。このような人間がただ自分の欲望をそのままにしておいて、坐禅をすれば、一応は坐禅の姿勢はしていても、実はそれは欲望の追求であって、拳句には、兼ねてからの目的を達して満足感を得ると「見性」したなどと思つてしまふ。これでは全く、眞実を行ずる坐禅ではなくなつてしまふのです。それで坐禅するといふことには、どんなことでも、例え公案であつても工夫してはならない。公案工夫することは、それは坐禅を修行していないということです。公案どいうこれは、日常生活の中で真実に生きる努力している禅者は、どうあるべきかを学ぶ、禅者の最も重要なテキストであつたので公案だったのです。即ち禅者にとって公案は不可欠な日常生活における鑑であつたのです。

結局、坐禅は、日常生活に使つてゐる自分の身体を、本来の身体に返して、身体が身体そのものを努力するということであったのです。身体そのものということは、うつかりやつています。小さな自己というものの追求しかや

りしていると、身体そのものを努力することが、そのようになつてはいなくなつています。私達は生理的に、自分の欲望のみの追求にのみ突っ走つて行動してしまうからです。この人間の生理的 requirement のままにしていたならば、永久に尽千方百界の眞実人体の修行や実証はあり得ず、ただ自己満足に生涯を終ることになるのです。然し人間はこの生理的 requirement によって行動せざるを得なくなつてゐる。そこでこの尽千方百界眞実人体の事実を、日常生活の中で、公案を十二分に学ぶことによつて会得しなければならぬ。禅者にとつては日常生活の中においての公案の参究は不可欠で、これによつてのみ、それで眞実の実修実証の坐禅が出来るようになるのである。故に永平門下では古来聞法を非常に重じた伝灯が今日も伝えられてゐるのである。

かくて坐禅は、尽千方百界の眞実を実修し実証することができますが、我々はそれをただ求道心だけで、猛進するならば、結局坐禅を一応は修行しても、それは坐禅にはなりません。そこで、一番大切なことは求道心の持ち方、即ち発心の仕方が面密でなければならないのです。人間は、目が醒めているて、意識がはつきりしている限りは、自分のことばかりやつています。小さな自己というものの追求しかや

つていません、これは生理現象でやっているのですから仕方ありません。仏道修行はこの生理的習性に流されないよう努力することだったのです。我々の利己主義は、生理的習性ではあっても、本来の生命活動には全く利己主義も自我意識もなかつたのです。したがつて坐禅は利己主義、自我意識、意志意欲以前の、つまり川の流れでいうならば、水面の波紋にまかげず、本流をつとめることであつたのです。それが手を動かしたくても動かすのを止め、足を動かしてもそれもやめ、頭の中に考えが浮んで来てもこれに取り合はず浮び放しの不動の正身端坐がそこに現成するのです。そこの人間の気張りが絶対にあつてはならぬ、これが只管打坐であり、かくて真実は修行され実証されるのである。この坐禅の実態が修証不二」ということであつたのです。

宗門では何かと言うと、修証不二が言われているが、本当にこれが分つて貰えているのかと疑いたくなることが屢々です。道元禅師が修証不二の只管打坐以外には仏道はあり得ないことを諄諄と教えられているから、言つてはいるだけで、これが本当に信ぜられているかどうか疑わしい。現実にはいつも別の方角の方へ暴走しつつあるのは、一体ど

うしたことであろうか。道元禅師は無所得無所悟の只管打坐を生涯お説きになつておられ、またこれが宗門の標語として唱えられているものの、實際にはあまり坐禅が修行されていないで、外の方への努力に専注されている。ことにすると本当の坐禅が無視され忘れられている場合も珍しいことではない。これは今に始まつたことではない。

私はよく師匠から、若い時代の宗門の状態をよく聞いています。私の師匠は佐藤泰舜禅師さんとは同級生で親友でした。また同級生に、山田靈林禅師さんもおられました。あの時代は坐禅するようなのは、特別の人間に限つて、一般には全くするものはいなかつた。したがつて修証不二の只管打坐を口では言つても、その実相をだれも知らなかつた。それで臨済宗で見性して來たという原田祖岳という人物が現われたら、見性坐禅と只管打坐とは、全く次元の相違した異宗教であると知らないで、求道心のある真面目な若い学人は彼の下に雲集したものだと、私に話してくれました。これなどは人間の生理的習性に従つたまでのことと止を得ないことも言えます。お前達の坐禅は何にもならないじやないかと言われば、その通り、何にもならない。これでは仕方がないということになつて、つい熱

心に見性目当ての坐禅に努力するようになるものです。だから本当の坐禅なんかやり手が、殆んどなかつたと師匠は言つていました。したがつてあの時代は坐禅を本当に修行するには、臨済宗へ行かなければ駄目だという風潮があつたと聞いていました。また私自身もそのように思つて臨済宗の僧堂にご厄介になつたものでした。

私は昭和十四年秋に永平寺に上山しました。本山でやつていることが、全て形式的なように思われて仕方がなかつたのです。時間が来たら坐禅をする、それ以外はしない。

当時の私はどこまでも坐禅を坐り切つてやろう、原田祖岳さんみたいになりたいと真剣に考えていました。だから私は坐禅修行にあせつていましたので、永平寺の生活がまだるこしくて、つまらなく、やりきれなかつたのです。それとくとも、実は京都で久松真一さんの講義を聞いて、どうしても坐禅しなければならないと覚悟をきめてしまつていたからです。

それから宗門に帰つて寂しくて仕方がなかつたのです。やつている坐禅が全く反応のない坐禅ばかり、それも形式的にやつておる。きつた時間だけやつて、一定の時間が過ぎれば止めてしまう。こんなことで宗門はよいのか、これ

で禅宗といえるかななどと本気でそう考えたものでした。したがつて永平寺にいることが馬鹿らしくてしょうがなかつたのです。そのとき私が一番親しくしていった雲衲で加藤黙堂といふ人がおりました。この人は私より可成り年長者でした、ある時、私は彼にいつ永平寺を逃げ出そうかと考へてゐる最中だ、こんな所におつたんでは、形式的な坐禅ばかりで本当の坐禅ができない、俺は真剣に坐禅修行をしようと考えてゐる、と、私の本心を打ち明けたんです。その時、黙堂さんは、「じゃお前さんは臨済へ行くつもりだろう」と言われた。その時には、私はもう既に京都の久松真一さんの所へ手紙を出して、どこへ行つたらいいかを推薦してもらつていて。久松さんは、臨済で今一番厳しくて、鬼叢林と評判のところは、九州の久留米の梅林寺です、それでわたしが薦めて梅林寺へ行かせたものは、殆んど途中で逃げ出してしまつてゐる。それに君は曹洞宗の人だから、とりあえず京都の方がよい。それには師家と僧堂が一番いいのが妙心寺ですが、道元禅師とも因縁があることだから、建仁寺へ行きなさいと推薦して貰つてゐた。そこでどうせ行くのなら鬼叢林の梅林寺に行くことに決心してい

た。かように黙堂さんに話した。

その時黙堂さんが言うのには「わしも昔、伊深の正眼寺へ盛んに通つたもので、向うさんのことはよくわかつていい。おみやあさんナモ、臨済宗というところは坐禅せんところやで。それにまた坐禅の仕方が全く違うんやから。それに坐禅中に矢鱈とどなつたり警策で目茶苦茶にたたいたり、その上坐禅中に拍子木を鳴らし、引鑿を鳴らすので坐禅なんかできやせんから、やめなはれ」と言われた。そして「おみやあさんがここに居るということは、御開山がお膝元で修行することだから、余門へは行きなきんな」と再三再四留められたものです。然し私は黙堂さんの留めるのを振り切つて、遂に永平寺を下山して、梅林寺に行きました。

実際に梅林寺へ行つてみて分かつたことは、黙堂さんの

言葉通りに坐禅をしないということでした。それに坐禅といふものの性格が全く違うということでした。それは今私が話しておりました眞実といふものの取り扱い方や、考え方が全く違つていた。それから解脱といふことの意味も違つっていた。勿論のこと悟りの内容も、全く次元が違つていたということです。つまり、言いますと、いずれも禪宗と

言いますので、用語や經文や行事などに共通のところが非常に多い、然し全く別の仏教といったようなものでした。臨済宗と曹洞宗との相違は「日蓮宗と真宗の差よりもつとひどい」とは聞いておりました。けれどね、実際行つてみまして、こんなにも違うとは全く思つてもいなかつたものです。それをこれまで曹洞宗の若い人たちで、その相違を全く知らないまま、ただ求道心の燃えるにまかせて飛込んで、猛進してしまう人がよくあつたものです。それで全くその人の一生は誤ることになつてしまします。そしてその人は生涯方角違いのものに自信を持つことになります。本当に氣の毒でなりません。

六

私は宗門において最も大切なことは、日常なんともなく生きているということ、このことが、何よりも有難いことであることを、心から感ずることだつたのです。何故ここでこのようなことを特に言うのかと申しますと、道元禪師が初めて、如淨禪師にお会いになり、そして「眼横鼻直なることを認得」されたのでした。つまりそれは自分の体は

いつも当前であるが、この当前であることを、これまで全く気付いていなかつたが、この時に始めてはつきりと、この事実が大変なことであつたことを知らせて頂いたということです。そして我々がそれまでに喜んだり、悲しんだり、安心したりして、大騒していたことは何んでもないことをだとうことが分つたということです。したがつて「眼横鼻直なることを認得して」最早や、絶対的な価値を知らせて頂いた以上、誰が何んと言おうと、最早や、それに瞞れて、それに惹きつけられることない。だから元のまゝの自分に自信を持つて帰国することが出来たということです。だから「人に瞞せられず。乃ち空手にして郷に還る」と言われているのです。

人間といふものは、自分が感激するような体験でもすると、自分のような体験をした者が、どこにあつたかというような誇りを感じるものです。これは自分がそのように思ひ込んだまでのことです。そして自分がそのように思ひ込んでいるだけでは済まないで、それを他人に誇り、他にこれを宣伝しないではおれないものです。このようにして遂には、宗教のカリスマが誕生する次第です。したがつて彼等のところには絶対に眞実はあり得ない。彼等には永久に

「眼横鼻直」の無限の価値は通じない。
したがつて「眼横鼻直を認得した」道元禅師には、このようなカリスマ的なことは、全く何に一つもあり得なかつたのは当然です。だから「空手にして郷に還られた」のです。道元禅師は尽十方界眞実人体の修行者でした。故にあのカリスマ的な教祖などのような忘想的修行は全くあり得なかつたので「一毫の仏法なし」と言われる所以あります。

教祖達は全て自分の考えたこと、自分の好きなことを、絶対的なことのように誇大妄想して言い放つてゐる。そうすると信者はただそれを信じ、その言葉を頂いている。これが本当に「人を瞞する」ものであり「人に瞞せられる」ことであつたのです。仏法はそのようなものであつてはならなかつたのです。

お釈迦様のお師匠様というのは、法です。即ち一切法です。お釈迦様に一生涯、法を修行された方なのです。道元禅師も法の修行者でした。したがつてカリスマ的な所はないので、これといって特別な何も持つものがなかつたわけです。だからして自信をもつて「空手にして郷に還る。一毫の仏法なし」と言われているのです。

これというのは、全部が仏法であり、特別なものは、何に一つもなかつたのです。したがつて仏法は特別な神がかり的な自己満足的修行することではなかつたのです。何故ならば、一切衆生悉有仮性だからです。したがつて宇宙の全てが仮性、即ち真実です。故にこれこそはという特別であるものは、全てあつてはならぬことです。こうしてみると、全てが仮性であり真実であつてみれば、特に外道といふものがあるわけではないのです。あの外道といふのは一切衆生悉有仮性に背を向けて、即ち広い宇宙に背を向けて、小さな自分だけの家の中にとじ籠つているものです。したがつて思想家は殆んどが広い宇宙に見向きもしないで、小さな自分だけの家にとじ籠つているから外道だつたのです。しかし仏法の方からは外道も一切衆生といふことになつて、外道といふものはありません。

かくて全てが真実であつて、真実以外の何物もあり得なかつたのです。この事実が心ということであったのです。したがつて心は決して精神的なものでも、意識的なものでもなかつたのです。つまり、この宇宙全体の真実が心であったのです。ですからこれを黄檗希運禪師は「当体即是なり」と言つています。ところがいつの間にか、変なふうに偏向してしまいました。宋の時代になりますと、カリスマが出てまいりました。そして変なふうになつてしまつたのです。つまり言いますと、これは一重に人間性の暴走が、禅を堕落に導いたと言わなければならないのです。即ち人間なるが故に堕落したと言えます。

私は終戦後に満州から引きあげてきました、パチンコの流行にはびっくりした。未だに流行つていますが、あのパチンコの発祥地は名古屋だったそうで、私と同じ誕生地とあつては、いささかがっかりした。これというのも偶然のことではなくして、人間が本来持つっているパチンコ的なものが、これを生んだのです。このパチンコ的なものがそつくりそのまま禅の方へやつて来まして、それが大慧宗杲の禅を生んだわけです。そしてカリスマ的なものへ暴走してしまつたのです。それだから看話禪が宋代には一世を風靡したと言われています。これは珍しいことではあります、あるべくしてあつたことです。これはパチンコ的人間性によつて、発生したものですから不思議はありません。

結局今の臨済の看話禪は本当の臨済禪じやなかつたのです。本当の臨済禪であるならば黄檗希運禪師の「当体即是なり」でなければならないのです。即ち全てのものが、是

で、特別な体験をするようなものであつてはならなかつたのです。なんでもが、全てが真実であり、真実以外ということものはなにもなかつたのです。これが法華で言うと「諸法実相」ということです。みんな実相、即ち真実相であつて、真実相以外のものは、なにもなかつたのです。落ちこぼれは、人間世界にはありますけれども、仏法の世界にはありません。全てが実相だつたのです。

「何もかもが真実です、そうして落ちこぼれない」というところから、道元禅師は、特別にこれだけが仏法というものはないで「一毫も仏法無し」と言われ、全てが言うならば、仏の姿であり、真実相である。その真実相の展開を「任運に且く、時を延ぶ。朝々、日は東より出でて、夜々、月は西に沈む。雲収つて山骨露われ、雨過ぎて四山低る」、その時その時によつて色々と変化を示す自然の景色、これ仏の姿であり、真実の相の転変であつたのです。この自然の世界そのままが、真実の相であり。仏の姿であれば、別にあこがれて陶酔したりして、かねてからの理想世界を幻出する必要はない。そこではまともに自然の景色が見えるようになる。以上これまで述べた道元禅師の宗風の具体的な表現が、『永平広録』に貫していることを身近

に親しく読むことが出来るのは有難いことです。

自然のどの景色もそのまま、自分の好みによらないで、頂くように努力をするところに、道元禅師の「風流浅きところ、かえつて風流」と言う言葉がよく理解出来る筈です。一般的には風流人というのは、皆なそれぞれ個性が強過ぎて、一般人には余り近づけない独善的なところがある。したがつてつまらないところまで、彼等は凝つてしまつてゐるので一般的ではない。そうではなくて、まともな自然の姿そのままのところに、本当に風流を見るのでなければならぬのです。

私は昔こんなことを聞いたことがある。曹洞宗といふところの寺院には、余り宝物がない、建物だって碌なものはない、庭園だって名園などない。これで曹洞土民と言われる所以でしよう。ところが臨済宗なんか行きます、僧堂の性格が違つています。まあ料理にも相当凝つていて、庭園の掃除も仲々手がこんでいる。私も臨済宗の僧堂へ行っておる時に、料理の作りの貼案の手伝いをさせられて、実際に手のこんだ料理に吃驚しました。我が宗門の人達が作つておるものは、余りにも田舎っぽくて、問題になりません。それまで私はこうした精進料理には色々な難しい方式が

あるということを、知りませんでした。然し同時に私は余りにも人間がでしゃばり過ぎて、諸法実相の真実が見失われてはいないかということを感じました。これも宗風の相違によるこことでしょう。これに比較して曹洞宗の方は、いわゆる格式とでも言うことでは、一段と低いなと感ずるのは私ばかりではなかろうと思う。然しこの格式の低さこそ、即ち結局それは庶民的というよりは、一般的、普遍的だつたんです。道元禅師自身は権威を嫌っていたというよりは、寧ろ全く相手にされなかつた。普遍、一般、平常心に徹せられれば、これは当然のことです。したがつて国王大臣には親近せられなかつたし、また親近しないように門下に示されている。これはただ道元禅師があの時代の腐敗した貴族の生活に愛想を尽かされたからということだけじやないと思います。

それは諸法実相というところから見ると、全てのものに於いて、真実が見出されなければなりません。そして今まで全く何とも思わず、過していたことにも真実が見出されるのです。このように仏教者は一般的なものとの見方とは違わなければなりません。ここで道元禅師の仏法の根底を理解願いたいと思います。

『永平広録』の八巻の二十丁右二行目、こういうことがある、ここを特に紹介しておきたかったのです。それは

「伝法之師、最も知らざるべからざるは、人を接するの一句は仏心印を伝わるに非んば、豈に敢てせんや」

という一句です。つまり伝法の師たるもののは、これだけのこととは、是非心得ていなければならぬということです。

そして人を指導する一句が、仏心印を伝えるものでなければ、何も言うてはならないということです。「如何が是れ人を接する手段。」それでは一体どういうふうにしたならば、それが本当に人を接する手段になるだろうか。そこでどういう具合に道元禅師は人を接せられたかといふと、「それ求道の心を、一時に放下する是れなり。この放下底、實に大道に徹するの底の時節なり。」とあります。私はこの一文には、びっくりしました。これでは世の中人の言つていることとは反対です。普通には求道心をしつかり持つよう教え指導するものです、それを「求道の心一時に放下する」とあつて、即ちこの「求道心」これをなくしてしまえということです。

「この放下底、實に大道に徹する底の時節なり」とあります。つまり我々は、このいつも「放下底」、即ち一切手から放してしまうこと、つまり何ものも自分に取込まないことを、努力しなければならないのです。したがつて私達の修行の努力は、この放下底を努力することでした。放下底といふことは、何ものも取り合はないでただほつておいて、そのままにしておくことではありません。この放下底を努力することをしなければなりません。これを努力することがなかつたら放下底になります。この放下底が、大道、即ち真実を実修し実証することだつたのです。実修し実証することは、完成を目指して努力するのではなく、即ち「放下底」を努力することで、その努力そのものが大道であったのです。

一般的な求道ということでは、大道に徹することはあり得ないということです。何故かと言いますと、求道は、結局のところ自分の好みを追求することになつてしまつてゐるからです。人間は決して嫌いなものを追求することはありません。自分の欲しいものだけに向かつて、一生懸命暴走するものです。眞実は我々が、好もうが嫌らおうが、そのような我々の意向とは全く関係はありません。我々の好

き嫌いを超えたものでなければならぬのです。だからどうしても大道に徹底するのには、求道も投げ出してしまわなければなりません。この一切の放下を可能にしてくれるもののが、これが坐禅の道だつたのです。放下底でない求道は、如何にしても、決して大道に徹することはあります。眞実は自分の好みというようなものであつてはなません。言うならばその自分の好みを拾つて歩くようなものが、一般の求道とか、真理の探究などと言うものです。

「實に大道に徹す底の時節」は、「放下底」であつたのですが、更に永平広録では「古人のいわゆる、目撃に道存す」と続けられています。この古人は莊子の下巻の田子方第二十一にある孔子の語です。これは目撃したものそれが眞実である。つまり眞実は直觀するものであつて、探し求めめて、ようやくに到着するものじやないということです。俺は何年かの修行の後、ようやくにして眞実にたどりついた、とうとうやりとげたというようなものであつてはならぬことです。うつかりするとそのように考へてしまうのです。普通一般にはこの語は、ほとんどそのように考えられてゐるものです。

昔、西田幾太郎さんが、「禪の研究」を著述して、その

中に直観ということを主張していました、然しここの目撃は普通の直観と違うと思います。直観してから我々はそれをもとにして判断すると考えています、つまり我々は直観をそのまま受入れてはおりません。

この目撃は、直接見たら、そのままでよいということです。それに判断を加えない、そのままが本当のことだといふことです。人間というものは目で見たものを、必ず自分が納得出来るようにしないと承知が出来ないものです。つまり人間は、自分のそれまでの経験によつて、自分のものとして持つているもので、目で見たものを、とりかえて、そして納得して自分の理解を作り上げているのです。したがつて理解したものは、直接に目でとらえた本物ではなくて、必ず自分のものに置き換てしまつていています。

このようにして人間は判断をしているわけです。だからして判断されたものは、極端な言い方をすれば、そこでは変形されて、そしてそれを人間は受け入れていているというわけです。

だからここで『永平広録』では、この古人の語に対しても「此語は什麼ぞ、畢竟如何。」と言われている。何故このようなことが言われているかというと、それはすぐに「剣

去つて久し」ということがあるからだということです。これは中国の語録なんかによく出てくる間違の標本なのです。これは舟に乗つておつて、川の中に剣を落したが、すぐその場で剣を拾い上げようとしないで、後刻に拾おうと、船の縁の剣を落した場所に、目印をつけておこうといふので、舟の縁に印したというものです。この舟の縁の印は、動きませんが、舟 자체は動いておつて、その印の場所は、すぐに剣を落したところではなくなつていて。こんな馬鹿な探し方はないでしょう。人間の物を判断することの正確でないことは、丁度このようです。人間は目の前の物を、自分の知つているものと、置き変えて、これはこれこれだと決めてしまう。このやり方は、正に「剣去つて久し」であったのです。

これは外ではない私達の仏法の見方が、殆んど「剣去つて久し」というようなことが多いといふのです。それで『永平広録』では、この辺のことを、手厳しく教示されるのです。そして坐禅によつてのみ、眞実が実修実証されるることは明示されるのです、したがつて道元禅師の坐禅は、単なる精神的活動でもなければ、勿論、精神統一というようなものでもない。中には、長い間坐禅をしておりまし

て、時には異常な状態が幻出することがありますと、非常にその異常さに感激したりして、その時を最高と思つてしまふ。しかしそれは最高でもなんでもない。ただそれは本人がかねて期待していた通りの状態が幻出したので、これに感激し興奮したまでのことです。

時に坐禅は無念無想になることだときめて、然もそれを自分でこのような状態でなければならぬと、先に決めてしまつてそれに向かって暴走するものであると思つてゐるもののが非常に多い。それは本当の無念無想でもなんでもない、立派な有念有想です。そして彼が幻出したものは幻覚であり、陶酔であったまでのことです。無念無想はそのように感ずることではない。我々の本来の生命活動の大自然の様相だったのです。したがつて、ああ、気持ちがいいな、最高だなという幻想とは、全く次元が違つてゐる。彼等の無念無想は全て感覚であつたのです。本当の無念無想、無我と云ふことは感覚することではなく、感覚以前の事実であつて、尽十方界の真実の実相であつたのです。

無念無想が自我の次元ではありません、自我以前です。私達が今日こうして生きているのは、自我が中心であり、主体であつて、一にも二にも自我であつたのです。つまり

り、それは自我意識の活動に外ならなかつたのです。そしてこの自我意識が主体になつて日常生活をしていふのです。ところがこの主体である自我意識も身体の生命活動の状態の一つです。したがつて身体の調子の衰えた時にはその主体の姿も微かになつて、身体が休息すれば主体も消えてしまつてゐる。身体の生命活動の衰えた時には主体は働くことはしない。したがつてその時は苦惱も少ない、身体の盛んな時は苦惱も多いことになつてゐる。昔私が大中寺におりました時に、一名の精神病者が居りました。坐禅会をやつていると、時々精神病者がまぎれこんでくることがあります。駒沢大学へも、宗務庁から紹介して貰つてノイローゼ患者が来たことがあります。患者は坐禅をしたいので、坐禅をさせてくれるところを紹介してくれと言つて、宗務庁へ行つて、それで私のところへ來たのです。その時に私はその人の顔を見ておりますと、大体、分かります。こちもとうとうノイローゼ患者を見分けることのベテランになつてしまひました。

最初のうちは、彼はさかんに坐禅しなくてはと言つてゐるのですが、私はじつと彼の要求を聞いているうちに、彼が坐禅をしたいと言つて來た事情がわかつて來ます。そこで彼

の顔をよく見て、外のことは何も言わないで、單刀直入に「貴方は、今迄に何回ぐらい病院へ行きましたかね」と尋ねると、ピタリです。「はい、三回行きました」「発病してどれくらいになりますか」と言うと、「はい、三年です」と言う。「今貴方はそのノイローゼを治そうとして日夜苦労しているのではないですか」「ハイそうです」と。「貴方は夜寝られますか」と言うと、「寝られません」と言う。寝られないなんていうことはありません。本当は寝てるんです。ただ本人が寝たつもりがないだけのことで、自分が意識しない時にチャンと寝ているのです。だから本人は寝られないと言うのです。つまり人間というものは、本当の自分の姿が分からないんです。

それから結局「貴方は坐禅をしない方がいい」と言つてやり、更に「折角ですが、今貴方の顔を見ると、疲労困憊しています。氣の毒で仕方ない。それというのは、病気を一日も早くどうしても治療しようと苦しんでの明け暮れであるからです。病気といふものは、貴方の都合ではなく、身体の方の御都合ですから、貴方は我儘を止めてジッパーと病気は大切にしてあげなければなりません。つまり折角の病気ですから、素直に病気になつて、病気を大切にして、

厄介もの、災難なんていふような得手勝手な氣持を持つてはいけません。一生懸命に病気をして大事にしなさい、治すことばかり考えないで、安心して病気をすることです。」とよく言つてやりました。

とかく人間は生活の障害になるようなことがあると、本來得手勝手な自我は、それを仇敵のように思い、惡魔と考えて、これを退治しようと闘争的努力をする、これは民族宗教なんかによく見られる事です。人の生活には惡魔なるものがあるものです。惡魔、惡靈などというものは、人間生活における独特なもので、得手勝手な自我意識が生んだものです。つまりこれは人間が色々なことを考へることが出来ることから起ることです。人間の頭の働きほど微妙なものはないでしょう。天国考えたり、極楽考えたり、天女も幽靈も考へることが出来るのです。つまり実在していないものを、現実にあるように自由自在に考へることが出来る。ところが、人間の頭といふものは、或ることをいつまでも考へ続けていることが出来る。そしてその果ては、ついにそれが実在しているように思えてくるのです。更にそれだけではおさまらないで、それが実際に目に見えるようにもなる。その幻覚を本人は幻覚と思わないで、実在

と信じてしまうものです。

これは精神病者にだけ限ったことではない、普通の人にも、そのような質素はあります。これというのも他でない脳の生理活動の過程によるので、本人の意志でどうすることも出来ることではない。つまり誰れでもが精神分裂症的な状態になれるのです。私の伯母は浄土宗の尼僧でしたが、臨終の時、皆を呼び集めて、引磬持つて来させ、今阿弥陀様が二十五菩薩を引き連れて、私を迎えてそこの松の木の上まで参られた。御来迎だから皆お念佛を唱えてくれと言つて、唱名念佛の中で死んで行つたそうです。丁度その時に私が永平寺から下つて来た時で、その話を皆ながら聞かされました。こんなことのあるのは、人間の頭の働きの特性です。いつの間にか、それまで頭の中で描いていたことが実在的に見えて来る幻想作用は、他人事ではない。我々の自分の中にあることをよく自覚していなければならない。我々は平常は現実と幻想作用とをよくコントロールしているのです。人間はとかく陶酔してしまつてコントロールを失いますと、幻想作用が、手放しで活動し始めるものです。

コントロールを喪失した精神分裂症の人達には、幻想が幻想ではなくて、実在として受取られて、「世の中の人は皆な私を殺害しようとしている」とか、「世の中の人は私に毒を飲せようとしている」とか、「それを本気で信じて言動する。この本人にこの事を、なんとかわからせようとしたが、全く処置なしということを度々私も経験していました。これらは病気の人だけのことではなく、自分達の頭脳の働きの実際であることを、その時に私はよく見せて貰いました。ここで人間というものはどういうものであるかをよく考えて頂きたい。どれどどが間違つてているということではなく、それぞれが我々に与えられたものです。幻想作用そのものも間違つたものではありません、その時その時の状態によつて幻出する生命活動の一様相だったのです。

私達の坐禪には、どんな時でも、これが最高でこれが最低だというものはありません。それは人間の得手勝手な主観でもつて決めているものです。円山さんの言葉に「一尺坐れば一尺の仏、一寸坐れば一寸の仏」ということがあります。坐禪は自分の氣分の問題ではありません、尽十方界真実人体、つまり自分の体で坐るのではなく、宇宙の真実としての人体を修行することだったのです。宇宙は千变万

化している、そのいずれの一変も宇宙の真実相であつたのです。これが諸法実相ということです。坐禅は精神統一の静坐ではないし、また瞑想することではなく、諸法実相の実修実証だったのです。我々の坐禅は終始一貫、調子のいい時も、悪い時も、逃げ出したくなる時も全てが真実であるということが、信じ切れるまで徹底的に坐り抜いて頂きたいものです。長い間お話をしましたが、力不足でもつと『永平広録』で真実はどういうように説かれているかをお話をし、だからこのような坐禅が成立っているのだとうことを明かにしたかったのですが、又他日にさせて頂きたいと思います。